

書評

『なぜ人は市場に踊らされるのか?』



竹中正治 著／
日本経済新聞出版社刊
／1,575円（税込）

本書は、バブルの発生と崩壊のメカニズム、それに、バブルのサイクルにいかに対応したらいいかを書いた知的な経済実用書だ。

「金融資産の市場で経済主体の選好が極度に他者同調的になること」が主題だが、使用価値でなく貨幣価値が問題になり際限のない蓄積を追求する衝動が支配するからだ、というのが著者の見立てであり、これは資本主義の「業」のようなものだともいう。特に日本人は「みなさん、そうされています」には弱い。

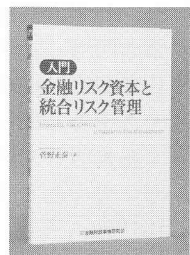
評者は、自らの利益のために、顧客にも、株主にもリスクをとらせる金融業（組織も、個人も）の役割をもう少し強調したいが、おおむね著者の見方に賛成する。現在を投資のチャンスとみる見方も同様だ。

元金融マンにして現在大学で教鞭を執る著者の物の見方と語り口は、たいへん実際のでかつ分かりやすい。たとえば、第3章にある住宅相場の高安の判断方法は、明快にして実用的であり、万人にとって一読の価値がある。ここがわかれば、「賃貸と違って、ローンを払い終われば自分のものになる」などといったポイント外れの理由で住宅を高値づかみすることはなくなるはずだ。もともと、すでに高値で買ってしまった人の場合、素直に読めるかどうかは、本人の度量の問題だろう。この問題に関する著者の説明は完璧だと申し上げておく。

第4章のマネーと有効需要とを説明した部分もわかりやすいし、第5章のバランスシート上の解説とこれを使った世界経済の見方も読み応えがある。たとえば、アメリカ経済がたんに脆弱なのではないことがわかる。

若い金融マンにぜひ読んでほしい好著だ。
（評者：経済評論家 山崎 元）

『入門 金融リスク資本と統合リスク管理』



菅野正泰 著／
金融財政事情研究会刊
／2,730円（税込）

今回の金融危機で、リスク管理手法の有効性に疑念が生じ、パラダイムの転換すら求められた。危機対応策の議論は政府・議会主導で、もっぱら規制面に関心が集まり、金融機関は受け身の印象が強い。しかし、バーゼルⅡ見直しも実施までには時間がかかるし、内容が二転三転する米金融規制改革議論をみても、規制が万能でないことは明らかである。

本書は、テール事象発生時にも対応可能な、金融機関によるリスク管理の精緻化という視点で、危機後の論点を網羅。見直しが現在進行中の状況でリスク管理の本を書くのは、困難な作業だが、最新情報まで盛り込み、著者の試みは見事に成功している。

専門用語の濫用による議論の混乱を防ぐため、重要概念

についての適切な解説を行っている。リスク合算モデルや保険会社のリスク管理といった「いま知りたい」テーマに心える構成がうれしい。読み進むとリスク管理の手法自体が否定されたわけではなく、残された課題が多かったことを認識できる。

著者は、金融機関、コンサル、研究者と多彩な経歴をもち、内外のリスク管理実務から規制動向まで精通しているので、豊富な事例紹介が本書の魅力を増している。

書名は入門だが、一般的解説は省略し、危機後の論点に絞ったため通読しやすい分量となっている。索引や独自の図表も充実し、資料的価値も高い。

金融市場は規制改革を待たずに変化を続け、次なる危機が忍び寄る気配も。バーゼルⅡの精神である金融機関の自己リスク管理実現に貴重な指針を与える一冊である。

（評者：リッキーマーケットソリューション社長 富田秀夫）